

▶▶▶ 防災・減災・復興の担い手づくり～和歌山大学災害ボランティアステーションを中心に～

災害時、自分の命、 そして大切な人の命・地域を守る人材の育成

▶ プロジェクトメンバー

- 宮定 章（災害科学・レジリエンス共創センター）
- 塚田 晃司（システム工学部）
- 平田 隆行（システム工学部）
- 西川 一弘（Kii-Plus）
- 南出 考（Kii-Plus 価値共創研究員）
- 林 美由貴（災害科学・レジリエンス共創センター）

○はプロジェクト代表

▶ 共創相手

- 和歌山県社会福祉協議会
- 和歌山市社会福祉協議会
- 日本財団ボランティアセンター（元、日本財団学生災害ボランティアセンター）

プロジェクトの背景

和歌山大学では、2004年から大学の知的資源を最大限に活用し、自治体と連携しながら地域防災力の向上を推進する和歌山大学防災研究教育プロジェクトを立ち上げた。その後変遷を重ね、2016年「災害科学教育研究センター」として、防災まちづくり・防災地域づくりの提案と地域との協働作業、防災プログラムの開発と実施、防災のための知識・知恵や情報発信等を行い、防災教育に力を入れてきた。2020年度から、紀伊半島価値共創基幹のもとに、災害科学・レジリエンス共創センターとして改組した。パイロットプロジェクトの柱の一つに「防災・減災・復興の担い手づくり」を位置づけ、これまでの自治体や地域との連携や、防災による知見を活かし、担い手づくりを強化していくことにした。

共創相手の和歌山県社会福祉協議会から価値共創研究員として、南出考氏（2008年に常設の災害ボランティアセンター設置に尽力）を迎え、本プロジェクトの災害ボランティアステーションの設置や担い手育成の助言・指導を頂いている。

プロジェクトの目的

「防災・減災・復興の担い手づくり」では、これまで和歌山大学の研究・教育の知見を活かして、教育機関

として、担い手づくりを行い、地域貢献をすることを目的としている。

その一つとして今回報告する、和歌山大学災害ボランティアステーション（愛称：むすばら）は、日頃から災害を「自分ゴト」と捉える、現場で学ぶ、被災者に関わる、地元のピンチに立ち上がることを理念として活動している。

プロジェクトの活動内容

今年度は、自主的な活動を目指すため、日常的にはワーキンググループ（1.メンバーのスキル研修、2.遠隔支援・情報系支援、3.啓発・防災教育、4.広報、5.地域活動・現場活動）を結成し活動した。ワーキンググループと同時に全体的行事として主に「オンラインミーティング」「防災食体験会」「防災ゲーム体験」「オンライン部室」「給水ボランティア活動」「学内関係者へ防災力強化のための体験実施」の6つの活動を行った。本報告では2つの活動を報告する。

①給水ボランティア活動

2021年10月3日（日）に、和歌山市の六十谷水管橋崩落で、和歌山市北部では大規模な断水が発生した。「むすばら」の活動理念の一つである『地元もピンチに立ち上がろう』に即し、当センターからの呼びかけで、本大学から延べ78人の学生が給水ボランティアに



図1 「水運び手伝います」呼びかけの様子

参加した。

参加した学生の一人は「心の底から感謝され、ボランティアの必要性を感じた。困っている人を助けることができやがいがも感じた」と話し、ボランティア活動は困った人が助かるだけでなく、活動した方も達成感を得たことがわかる。また、別の学生は「地域に水を運ぶのに困る人がこんなに多くいることを知った」と、地域の課題にも関心をもち活動をしている。全国の多くの大学にボランティアセンターはあるが、災害に特化したセンターは珍しい。常設していたおかげで、夕方断水から2日後という迅速に活動を開始することができた。和歌山市役所や、水を運ぶのを手伝ってもらった方、その様子を見た方から、多くのお礼の手紙を受けた。

②学内関係者へ防災力強化のための体験実施

(公社)日本非常食推進機構、和歌山大学生協との連携による学生生活応援&SDGs推進企画が、2022年1月24日～28日まで行われた。防災グッズと非常食が配られている会場近くで、26日～28日の3日間、むすばらは、防災カードゲーム体験、ロープワーク演習、焚火体験、そして、教職員から鉄道用はしご体験、新聞紙お椀づくり+ポリ袋クッキング体験、高齢者疑似体験を、むすばらがサポートし実施した。

プロジェクトの成果

本年度は、前年度同様コロナ禍で様々な困難はあったが、和歌山大学災害ボランティアステーションむすばらでは、オンラインと対面を適宜使い分け、活動を行った。



図2 鉄道用はしご体験

設立されたばかりであり、地元や全国の報道に多く取り上げていただいた。学生たちの励みとなるとともに、地域の方にも知ってもらう機会になった。

給水ボランティアの後は、参加した学生が、高齢者が多い等、災害時には地域で困難を抱えることを実感し、地元地区の自治会長や民生委員と知り合い、防災訓練に参加するなど、協働の芽生えができてきたと同時に、給水ボランティアで、技術的・物理的課題を感じたため、来年度は、研修を通じての災害ボランティアリーダーの養成や、メンバーが増えるよう勧誘を考え、教養科目『災害ボランティア学』設置する予定である。

プロジェクトを実施に際し、多くの自治体の方や、地域の方々に、本報告をもって感謝を伝える。

プロジェクトに関するお問い合わせ

災害科学・レジリエンス共創センター

E-mail : bousai@ml.wakayama-u.ac.jp

URL : <https://www.wakayama-u.ac.jp/disaster/>

